

1942年7月、咸鏡南道洪原で、ある韓国男性が警察の検問に掛かる。対応の態度が不遜なりとして、事は家宅捜索へと発展する。その男の姪にあたる女子学生(咸興永生女学校2年)の日記まで押収されるが、そこにたまたま「今日国語を使って先生に叱られた」という記述が発見され、これが問題となる。女子学生の授業を担当していた丁泰鎮は身柄を拘束され、拷問の末、彼の属していた朝鮮語学会が「独立運動のための民族主義者の団体」であると虚偽の自白を強要される。こうして朝鮮語学会は日本支配打倒を目的とする秘密結社と見なされ、33人の学会員が逮捕され、16人に実刑判決が言い渡される。拘束中の拷問により2名の死者を出したことから、「朝鮮語学会事件」は、日帝下の警察の残虐さを物語る事件として、韓国の歴史教科書に取り上げられてきた。だが事件の実態となると、不明な箇所が多い。

まず第一に、罪状認知が、明白な事実誤認あるいは、意図的なすり替えの結果だということは、明らかだろう。というのも、授業中に教員が「国語」すなわち日本語の使用を生徒に禁止した、

「日帝」支配下の民族意識と国語問題(上)
朝鮮語学会事件再考

国原 日本文化研究センター
総合研究大学院大学院 大学院 教員
稲賀 繁美

などといった状況は、「国語常用」、「国語浄化」政策のすめられていた40年代初頭の現実としては想定し難いからだ。「国語(クゴ)」すなわちお国言葉＝韓国語／朝鮮語を教室で使ったことを、先生から言い咎められたというのが、問題の「日記」の語る事実だろう。ところがこの「日記」は、公共空間で国語＝日本語が否定された田々しき事態の物的証拠、とまで扱われた、無茶といてよい解釈にすり替えられた。

とすれば第二に、事件の背景として、警察側に相当の予断のあったことが暗示される。そもそもこの女子学生は韓国語／朝鮮語を「国語(クゴ)」と日記に記していた。これだけでも、彼女は日本語を自らの国語と認めない、という反日イデオロギーを立派に体得していたことになる。そうした価値観を学生に植え付けた教師は、当時なら反逆と不服従の「民族主義者」に該当し得よう。

ここまできると、どうやら「日記」の件は、どっちあげとまでは言わぬにせよ、あらかじめできあがっていた陰謀説に好都合な(あるいははなはだ杜撰な)証拠物件を提出する口実な

過ぎなかったらしいことも、臭ってくる。そして実際本事件の判決結果を見る限り、朝鮮語学会の活動を根こそぎ弾圧する意図が、そもそも事件の発端にあった気配が濃厚なのだ。

ではここで問題となった朝鮮語学会とはいかなる性格を宿した学会だったのだろうか。

近代韓国最初の国語学者とされるのは、『大韓国語文法』(1906)、『国語文法』(1910)の著者周時経(1876-1914)。そして「国語」という用法そのものも周が1907年前後に唱えた「国語国文」論に由来するといわれている。そこで周の言う国語とは、もっぱら世宗大王によって制定されたハングル文字によって表記されるべき言語である。中国文明の漢字への依存を払拭しようとするこの態度には、日露戦後の韓半島の強烈的な国民意識が灯っているといって差し支えない。そして周の『国語文法』は、1910年の『日韓併合』に伴い『朝鮮語文法』(1911)と改題を余儀なくされた。国語と国民意識とは、このように密接な紐帯をなしていた。

こうした思考連鎖の背景として、金澤庄三郎(1872-1967)、小倉進平(1882-

1944)の存在も無視できない。金澤が文部大臣外山正一およびその秘書官、服部宇之吉(後の京城帝国大学初代総長)の推挙を受けて1896年渡韓したのに対し、小倉は東京帝国大学で上田万年の下に言語学を学んだ。上田は国語こそ国民意識の紐帯と主張したが、これは上田の独創というよりは、当時のドイツ言語学の常識に属す。その弟子にあたる小倉は、1926年に開学した京城帝国大学文学部、朝鮮語学担当教授として赴任した。金澤がいわゆる『日鮮同祖論』(1929)の立役者として記憶されるなら、小倉は1912年から30年にいたる19回の渡朝で朝鮮各地の方言を調査したことで知られる。30年代の日本の国語調査委員会が標準語の確定を目標として方言調査を行ったのとは対照的に、小倉は現実の朝鮮語に関してはさほど関心を示さず、もっぱら朝鮮の方言に保存されている古語古音を探り、朝鮮語の歴史的研究に傾注したとされる。こうした日本帝国わたりの国語学と、韓国の国語学とは、どのような関係にあったのであろうか。

[以下次号]